

日本人の活躍と経済協力の現場で生きる日本の 伝統技術

在エジプト日本国大使館

1 新オペラ・ハウス

1983年、ムバラク大統領（当時）が訪日した際に新オペラ・ハウス（正式には「教育文化センター」）建設が合意され、我が国の無償資金協力により1988年完成、エジプトのみならず中東における文化活動の拠点としての地位を確立しています。日本人の音楽家やバレエダンサーが日常的に公演をおこなっているほか、開館30周年を迎えた2018年秋には、日本オペラ歌手中丸三千繪氏によるオペラ「アイダ」が公演され、好評を博しました。

2 大エジプト博物館建設

現在、エジプトで最も重要な歴史的文化遺産を保存・展示しているカイロ考古学博物館は、開館から100年以上が経過し、建物・設備の老朽化が目立っている上に展示のためのスペースや技術、人材が不足している状況にあります。

そのため、2020年の開館を目指して、現在、ギザの3大ピラミッドのそばに、新しく「大エジプト博物館」の建設が進んでいます。この新しい博物館には、黄金のマスク等のツタンカーメンの遺物を中心に、約10万点の遺物が収蔵される予定となっており、我が国は、842億円の円借款の供与（総事業費約1,400億円）を行っています。

併せて、遺物の保存・修復のための技術協力及び、開館に向けた展示・運営計画策定のための専門家の派遣、研修等を含む技術協力を行うなど、エジプトの国家プロジェクトに対する全面的な支援を実施中です。

博物館の建設は、政変の影響で一時的に中断した時期もありましたが、近年は順調に進んでおり、遺物の保存修復も、博物館に併設されている「保存修復センター」を拠点に日本の専門家からの技術移転が進められています。たとえば、「和紙」を使った保存の技法や、遺物の移送に関する細やかな梱包など多くの技術は、既にエジプトの専門家に受け入れられています。



カイロオペラハウス



建設中の大エジプト博物館と技術協力



(了)